

Ⅰ.はじめに

中国内モンゴル自治区の草原観光と「ゲルキャンプ」の存在

- 草原観光：自然景観+民族観光（モンゴル族）
- 拠点としての「ゲルキャンプ」

モンゴル族の移動式住居「ゲル」を用いた観光施設で現在の草原観光の拠点であるが、その全体像ははっきりしない部分も多い。

＊「外」モンゴル＝モンゴル国にも存在。

⇒今回はこの「ゲルキャンプ」の特性について、内モンゴル最北部・フルンボイル市における現地調査の結果に基づいて報告。



内モンゴル自治区の位置



内蒙古自治区の草原観光地域

Ⅱ.草原観光の背景と「ゲルキャンプ」

内モンゴル自治区の草原観光

- 1978年頃から開始か。
- 本来は外部からのゲスト（ＶＩＰ、政治家、外国人）を案内して草原の暮らしやモンゴル族の文化を見せることから出発。
- モンゴル族の食文化、乗馬、モンゴル相撲、民族音楽、ゲル宿泊などの体験をさせる。

ゲルキャンプの存在

- ゲルキャンプ＝宿泊用ゲル+馬場+食堂・イベント用大型ゲル+広場+メインの建築物等
- 大規模なものから内モンゴルの牧畜民の農場内に設置するかなり小規模のものまで。


本当の（？）「ゲル」の姿
（内蒙古大学博物館）

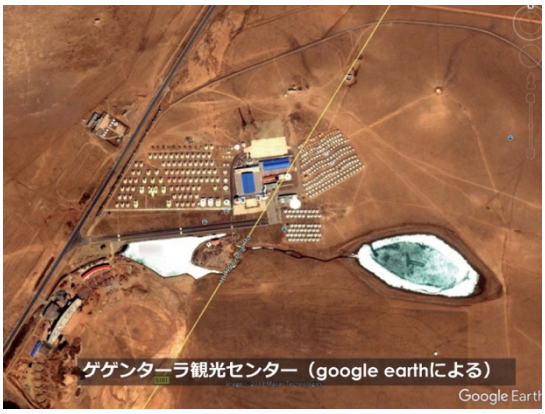
宿泊用のゲル


オルドス地域のゲル
キャンプの事例


乗馬や羊肉料理を
体験する



格根搭拉（ゲゲンタラ）草原の大規模なゲルキャンプ







Ⅲ.内モンゴル遠隔地の「ゲルキャンプ」：フルンボイル市新バルグ右旗の事例

- フルンボイル市周辺：近年草原観光が行われるようになった地域。
- 中小規模のゲルキャンプが多く、開業年も2010年以降と新しい。訪問客は北京など大都市から自家用車で来訪し、草原観光をして1泊で帰るケースが多い。
- 経営者は地元で牧畜業を営む者が多く、家畜の世話が比較的少ない夏（6-9月）だけサイドビジネス的に行う。「冬は忙しい」
- 自然環境や生業のサイクルに比較的うまく組み込めているのではないか。





Ⅳ.まとめ

中国内モンゴル自治区の「ゲルキャンプ」の特性

- 「固定ゲル」を用いた大規模なゲルキャンプもあり。⇒排水などによる草原環境破壊との批判も。
  ＊「退牧還草」政策と「生態移民」
- モンゴル高原における草原観光のスタンダード：もしなければ観光自体が困難？
- 季節的変動の問題：どれだけの施設を作ってもせいぜい6-10月程度。牧畜民が暇な時期に運営可能。現金収入のあるサイドビジネスか。
- 地域的差異、社会経済的背景、草原観光普及の経緯など、顧慮すべき事項やテーマが多く存在するか。

内モンゴルにおける草原観光の季節的変動研究：自由懇談（部分）

澁谷　教えてください。日本で出た論文だとこういうのを「ゲルキャンプ」って言っているんだけど、現地ではどうですか。

フフムチル　そうは呼ばないです。

澁谷　何か言い方がありますか。

フフムチル　中国語で「旅游点」、「観光スポット」と。

澁谷　「観光地」と同じような意味で。

フフムチル　そうです。

澁谷　実は院生のセレンメンさんは研究中に困って、「ゲルキャンプってそもそも何？」みたいな感じになったんです。それで、グーグルアースを使ったんです。グーグルアースならゲルキャンプがどんなものか画像で出る。これ（p.57 右列上から 2 番目のスライド参照）なんかおもしろくて、冬で多分上のテントをとっちゃっている。そうすると、このゲルは固定しているというのがわかるんです。ただ、これを全部見つけて歩くわけにいかないので、部分的にしかわかりませんけど。

B 氏　（中部大学オープンカレッジ受講生）これは、一般的には何泊ぐらいするんですか。

澁谷　1 泊でしょうね。

B 氏　そうすると、例えば、海外からのお客さんが日本で旅館に 1 泊するだけで、あとは通常の国際水準のホテルに泊まるというのと同じように考えればいいんですかね。モンゴル体験として 1 泊するというのは、日本体験として日本の旅館でふすまだとか床の間を見るみたいな、そういう感じなんですか。

澁谷　インバウンドならそうでしょうね。近いと思います。でも、多分中国の人が遊びに来ても 1 泊ですよね。

セレンメン　ほとんど 1 泊です。

B 氏　アイスランドなんかでは、氷でできたホテルがあるじゃないですか。体験ということでは非常に似ていると思うんですよね。

澁谷　そうですね。1 泊、話の種に泊まる。

B 氏　ですよね。だけども、一方でデラックス化しているという話を先ほど聞いたから、それは連泊とか、もっと快適に何泊かしてもらおうと考えているのかななんてね。

澁谷　あまりそういうふうには見えないです。シャワーとかあるんだけど、やっぱり 1 泊で帰っちゃうんじゃないかなと。

B 氏　イメージとしては、テントだと、簡易施設というか、メイクシフトの施設というふうに感じ取っちゃいますよね。

澁谷　そうかもしれないですね。

B 氏　私は現役のとき旅行会社にずっといたんですけれども、こういう観光は、まず中国の一部というか、中国ジャンルでしか扱わない。マニアックな人が行くというだけで。中国旅行を専門に扱っている会社がやるとか。あるいは、中国で問題が起こったときに、あそこに行けないから周辺のところに行き先を変更するとき使うという感じで。例えば、日中旅行

社とか、日中平和観光とか、ああいう会社は扱っていましたけど、メジャーのパッケージ会社、例えばJALパックとかルックとかパノラマとか、そういうところはやらないですよね。だから、パッケージには乗らないというところが、やっぱりちょっと目に触れにくいところかなと。

澁谷　中国国内でのパッケージツアーで使うゲルキャンプは、この写真（p.57左列一番上のスライド参照）のように、センターをつくっちゃって、周りに小さいゲルをたくさんつくる。こんな感じです。

B氏　それは西洋式のホテルのタイムシェアリングみたいな感じで、ホテルがあって、長期滞在のものがあって、真ん中にレストランエリアをつくったり、アミューズメントセンターをつくったりという、多分西側の人の考え方ですね。最初にそこへ着いてオリエンテーションをやって、そして、いろんなタイプの施設へ行かせるとか、そういう一つのカントリースタイルの考え方じゃないかと思うんですけどね。わかりませんけど、ただ、そういうのを参考にしている可能性はあるような気がします。

澁谷　逆に、自然にできた感じのゲルキャンプは、写真で見ると多分こういう（p.57左列一番下のスライド参照）感じだと思うんですね。本当はもともと牧場があって、その周りにゲルをたくさん設置してつくってしまうんじゃないかと思うんです。これだと、もう今のお話でいうところのパッケージ旅行には合わないような感じですけど。

B氏　何かの旗のもとに、みたいな感じで。しばらくここで住むぞみたいな、そういう歴史とか何かわかるといいですね。「旅」のもとは「旗」という意味だと言われていますからね。だから、マニアックな人とか旅行会社の人たちは興味を持って、一旦「いいね」と言うかもしれないけど、一般の人たちがついてこない。

澁谷　なるほど。実際にゲルキャンプにも泊まってみたんですけど、環境のほうもちょっと厳しいところはあります。マニアックな人じゃないと無理かもしれません。

B氏　それと、周りに何もないという感じはいいんだけど、これはなかなか日本人には耐えられないところがありますよね。とにかく次から次へと、劇場で見せる、何か食べに行く、観光をすると次々にやっていかないと、みんな落ちつかないというところがあるのかもしれません。

澁谷　中国内のパッケージツアーではあるんですね。

セレンメン　あります。

澁谷　ただ、日本からはちょっと、個人旅行しかない。

B氏　この研究とサステナブルというところがよくわからなかったんですけれども、これをどういうふうにサステナブルに扱っていくのか。

澁谷　今思っているのは、大きなゲルキャンプをつくるパターンは批判が多いんです。廃水がたくさん出したり、自家用車とかがたくさん来て周囲の草原を踏みつけていったりするんですが、この小さなゲルキャンプ（p.57左列一番下のスライド参照）なら大丈夫じゃないか。しかも夏しか営業しないんですね。

B氏　そうすると、季節性が問題ですね。

澁谷　特に現地調査をした場所は、すごく北のほうで、寒いので夏も長くは営業できないんです。

セレンメン　寒いときにはマイナス30～40度ぐらいですから、厳しい感じで。

澁谷　そうすると、サイドビジネス的に小規模にやれば、草原はもつんじゃないかと思います。要するに、長く続けていくために、増やさない、無理をしない、やや抑えるのが良いという考え方をしているんです。

B 氏　言葉としてサステナブルは美しいんだけど、ビジネスとしてやっていくと、それならあと半年どうするんですかとか。

澁谷　半年は牧畜をして、それはそれで収入があるので。

B 氏　だけど、一方でサービス業をやりながら、もう一方でものづくりをやるというのは、そういうことが急にできるんですか。人が変わるんですか。

澁谷　いや、同じ人がやります。

セレンメン　自分の牧場でやっていますから。

澁谷　同じ人がサイドビジネス的に夏シーズンだけこのお仕事をする。

B 氏　なるほどね。それはなかなか転換が大変ですね。リーダーがよくて、外との交渉をちゃんとやってくれるとか。

澁谷　そこはおもしろいですね。どういうふうに切って、どういうふうにやっているのか。

B 氏　小規模だと、まず集客が難しいので、それは何かリーダー的な、マーケティングとか、西洋とつながるとか、お客さんとつながることができる人。それから、サービスレベルが一定に保てるような教育ができる人。それから、オプショナルツアーだとかそういったことがきちんとオーガナイズできる人。それから、精算に至るまで、お金の流れがうまくつながっていくところですね。そして、戻していく。なおかつ、衛生面だとか、いわゆる来るお客さんの水準にヒットできるようなことをやっていかなくちゃいけない。

澁谷　こういう大規模なゲルキャンプ（p.57 左列一番上のスライド参照）だと、中国国内の方が来ると、人によってはずっと夜にマージャンして騒いでいるとか、客の方もあまり質がよくないなという感じがあります。わざわざこの辺境の小さなゲルキャンプ（p.57 左列一番下のスライド参照）に行く人というのは、それなりのこだわりがあって多少不便でもちょっと覚悟して行っているような感じがあるなと。

B 氏　そうでしょうね。それと、やっぱり着いたときにある程度、教育すると言ったらおかしいんだけど、お客さんに、ここまではできます、ここからはできませんとかということを、ちゃんとガイドラインとかエチケットとか、そういうのをきちんとオリエンテーションするんでしょうね。でも、やり方によってはおもしろいですよね。なかなか時間がかかるけど、おもしろそうです。

澁谷　ありがとうございます。どうですか。お客さんは来ているんですか。

セレンメン　はい、そうですね。

澁谷　で、もうかっているのかな。それなりに現金収入がちょっとあればいいのかな。

B 氏　例えば、イギリスなんかの B&B、ベッド&ブレックファストというのは、大きな牧場を持っているお金持ちの奥さんが余っている部屋を使ってアルバイトでやっているところが、コッツウォルズとかいろんなところにある。皆さん留学されていてご存じでしょうけれども、奥さんがやっていて、名前も聞かなくて、お金だけ何ポンド、と。全然ホテルと変わらないじゃないかと思うんだけど、娘がロンドンへ行っちゃっていて部屋が空いているからアルバイトでやっていますみたいな。ふと見たら馬が 10 匹ぐらいいて、すごいお金持

ちだなと。入り口から 5 分ぐらいかかるところの奥に家屋があるとか、そういう人たちは、要するに奥さんの片手間でやっているから、全然問題ないみたいですけどね。

澁谷　片手間のやつは関心あります。おもしろいですね。

B 氏　だけど、片手間というと、お客さんの要求度によってはうるさいですから、難しさがありますよね。

澁谷　彼女がこれで卒業しちゃうので、この後そのあたりも知りたいのですが、現地調査どうしようという感じなんです。

B 氏　エコにこだわっちゃうのか、こだわらないのかというところが、ものすごく分かれ道ですね。ハンディキャップの人をどうするのかというのと同じで。あれは旅行会社にとっては永遠の課題です。

澁谷　旅行会社は一応入っているんですか。

セレンメン　はい。現地調査によると、こちらに来られる観光客は、大体旅行会社を通して、直接この人たちに連絡してこない観光客が一番多いので。

澁谷　自分で車で来るの。

セレンメン　自分で車で来る人も結構いるんですけど。

B 氏　飛行場からのアクセスをどうするとか、中でどうやってオプションを回すとか、ガイディングをどうするとか、いろんな仕組みがある程度ないと。それを半年だけやるというのは、現実的には結構しんどいですよね。

澁谷　どのぐらいそれがしんどいのかというのが、こちらはいまいちイメージが湧いていなくて。彼女の修士論文発表会のときにも、ほかの先生から質問があって、経済的にどうなんだと。夏にちょっとだけでも現金収入があればいいレベルなのか、あるいは、かなり一生懸命やらなくちゃいけないのか。

B 氏　岐阜の鵜飼いが半年なんですよね。あれは名前を売るためにやっているから、補助金がついているんですけれども。

澁谷　なるほど。そういうこともあるわけですね。

B 氏　それと、オーセンティシティというか、さっき先生がおっしゃっていたあの問題は、また文化の問題だから。伝統とか。

澁谷　オーセンティシティを追求し出すと、この辺境のゲルキャンプ（p.57 左列一番下のスライド参照）に来るんだと思うんですね。この大きな観光センターになっているゲルキャンプ（p.57 左列一番上のスライド参照）じゃなくてね。

B 氏　そうそう。そういうことですよね。だから、多少の変化はあったとしても、やっぱり地元の年寄りが納得するのがオーセンティシティだと思うので、そういうことを考えるといいのかなと思います。余計なことを言いまして。

澁谷　いえいえ、ありがとうございました。